

B-2

古典日本語における「ての」について

菊池そのみ（筑波大学大学院生）

1. はじめに

接続助詞「て」に助詞「の」が後接した「ての」は、上代日本語から現代日本語まで見られる形式である。しかし、古典語の用例を見ると現代語とは異なる特徴を有しているようである。

- (1) 青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし (萬葉集・巻五・八二一)
- (2) 家族を連れてての外出は楽しい。／一生懸命努力してての結果であれば仕方がない。 (作例)

本発表は、古典日本語における複合助詞「ての」について現代日本語との比較から、前接語、後続語に着眼し、その用法について検討することを目的とする。なお、本発表における「古典語」は「現代語」との対置によって捉えるものであり、調査は上代から近世前期の資料を対象とする。引用した用例の本文、巻・章段番号などは使用したテキストによるが（詳細は稿末に記載）、一部、踊り字などの表記を改めた箇所がある。また、引用箇所の下線は全て発表者による。

2. 先行研究

2.1. 現代語における「ての」について

まず、姫野（1983）は「～して～する」の文において後の動詞が名詞化し、連体助詞「の」を介して修飾されるものを取り上げ、「～して～する」における2つの動詞が「推移・連続」、「原因・理由」、「方法・手段・状況」などの意味関係にある場合に「ての」の形で「連体的用法」が成立することがあると述べている。

次に、「ての」に続く被修飾名詞を動作性名詞と非動作性名詞とに分類して捉えた研究に茂木・森（2006）と丹羽（2006）とがある（名詞のタイプを茂木・森（2006）は「述語性名詞」・「非述語性名詞」、丹羽（2006）は「動作性の主名詞」・「非動作性の主名詞」と呼ぶ）。茂木・森（2006）は「述語性名詞」の場合には「付帯状況」、「継起」、「原因・理由」といった意味解釈が可能であること、「非述語性名詞」は「述語性名詞」よりも「ての」の形式の生産性が低いこと、テ節の事態と被修飾名詞の事態とは継起的もしくは並行的な関係にあり、この関係が逆行することはないことを指摘した。丹羽（2006）は「A ての B」の場合に、「B に内在的・付随的關係にある A によって B を修飾するタイプ」と「相対補充を表すタイプ」（「非動作性の主名詞」のうち相対名詞）とに大別している。前者には、A が B に内在する「背景状況」、「原因理由」、「方法」、「逆接」を表すものと A が B に付随する「様態」を表すものとがあるとし、後者は「時間性」を表し、修飾部の表す時間と主名詞の表す時間は「前—後」という関係にあると指摘した。

2.2. 古典語における「ての」について

小田（2015）は「の」が「て」を受けることがある。この「～て」句も名詞相当と考えられる」としている。また、小林（1995）が中世の抄物を中心とした「～ての用は」について抄物以外の言語資料への拡大を論じている。接続助詞「て」の用法については山口（1998）、近藤（2012）などに詳しいがいずれにも「ての」に関する詳細な記述は見られない。

3. 用例調査

上代から近世初期の資料を対象に、「ての」の用例を抽出した(表1)。なお、副詞に「の」が後続した形式(「かねての」、「せめての」、「なべての」など)や「にての」、「とての」、「以ての外」は対象から除外した。

[表1]から分かるように中世までの資料では、多い場合でも各資料に10例程度であるのに対して、近世の

『虎明本狂言集』においては40例見られることが特徴的である。各資料の用例数は、中古後期ごろから微増しているように見受けられるものの、散文・韻文、和文・和漢混淆文などの文体や資料のジャンルによる差について明確な傾向を示唆できるものではない。

[表1] 資料ごとの「ての」用例数

上代		中古						
萬葉集	古今和歌集	伊勢物語	平中物語	蜻蛉日記	津津保物語	落窪物語	枕草子	
4	6	2	1	1	1	1	1	
中古								
源氏物語	堤中納言物語	更級日記	浜松中納言物語	狭衣物語	大鏡	栄花物語	讃岐典侍日記	
11	1	1	2	2	7	7	1	
中世(鎌倉期)								
平家物語	義経記	保元物語	平治物語	宇治拾遺物語	海道記	建礼門院右京大夫集	十訓抄	
10	4	3	1	5	2	2	6	
中世(鎌倉期)			中世(室町期)		近世		計	
とほすがたり	徒然草	太平記	天草版平家物語	天草版伊曾保物語	虎明本狂言集			
2	1	7	10	1	40		143	

3.1. 後続名詞について

続いて、[表2]に後続名詞(句)の分類と用例数とを示した。名詞(句)としたのは、「またの年の夏」や「更に恨めしき」のように「ての」が修飾している範囲を名詞句と捉えるべきものを含んでいるからである。[表2]において、行為に分類した5例以外は非動作性名詞であることから古典語の「ての」には非動作性名詞が後続する傾向が強いことが認められる。

本発表の調査範囲で最も古い『萬葉集』の4例は、全て「ての後」の形式である(「飲みての後」、「濡れての後」2例、「ありての後」)。この「～ての後」の形式(仮名書き「のち」を含む)が、全用例の中で22例と最も多かった。「後」(のち)は宮島・鈴木・石井・安部(編)(2014)において上代から中世の17の資料に1049例見られ、名詞21056語中29番目に頻度の高い名詞であることが示されている。つまり、前提として語自体の出現頻度が高いということには留意する必要がある。しかし、同じく宮島・鈴木・石井・安部(編)(2014)において「事」(こと)は名詞の中で最も頻度が高いが、「ての」に後続する用例数は「後」と同程度である(「事」の方が2例少ない)。「ての事」の形式は『栄花物語』に1例、『天草版平家物語』に2例、『天草版伊曾保物語』に1例、『虎明本狂言集』に16例見られることから、中世後期以降に定着したものと推定される。

[表2] 後続名詞(句)の分類と用例

分類	名詞(句) ()内の数字は用例数、記載のないものは用例数1
時間関係	後(22), 世(6), うへ(3), ついで(3), 果て果て(2), ころ(2), ほど(2), 折, 際, 其あげく, 十余日, 朝け, 元年乙巳, 年
季節	春(2), またの年の夏, 秋, 冬
関係性	世, 別れ, 理運, 床, 御宿世
感情	恥(辱)(5), 悲しみ, 御悲, たのため, 更に恨めしき, 亦悲しき, 心ばせ, 憤り
事柄	事(20), 用(3), 申事(2), 左右, 仏の国などに来にける, 業, 罪科
人	山伏(3), 人, 昔人, 大將
場所	漢, 御所, 社, おく
行為	謀反(2), 京上り, 御ばからひ, 御祈
その他	重宝(4), 物語(3), しょうく(秀句)(2), 名(2), ちぎりき(2), 高名, 楽ども, その色, こめぼね, めぢか, ときん, けはひ, つら, 儀, 不寐, 支度, 勲功, 御移香, 花, 面目, 故, あまり

- (3) 月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも (萬葉集・巻七・一三五)
- (4) 玉の緒をあわ緒によりて結べれば絶えてののちもあはむとぞ思ふ (伊勢物語・三五)
- (5) あひ見てののちぞくやしきまさりけるつれなかりける心と思へば (平中物語)

- (6) 「抑これより穢土を厭にいさみなし。闇浮愛執の綱つよければ、浄土をねがふも物うし。たゞこれよりやまづたひに宮こへのぼ(ッ)て、戀しきものどもをいま一度みもし、見えての後、自害をせんにはしかじ」とぞ、なくなかたり給ひける。
(平家物語・巻第十)
- (7) 我等が尼に成った事を世に有り難い事のように人も言い、我が身にも思うたが、これは身を恨み、世を恨みての事なれば、様を変ゆるも理ぢゃ。
(天草版平家物語・巻第二・第一)
- (8) 四肢六根の働きは偏に腹の力に因つての事ぞ
(天草版伊曾保物語・腹と四肢六根の事)
- (9) 皆々へ申まらする、惣じてわたくしは、もんまうに御ざるによつて、哥道の達者な人をむこにとりたひとぞんじての事で御ざる
(虎明本狂言集・かくすいむこ)

〔表3〕後続名詞(句)の分類と時代ごとの用例数

	上代	中古	中世 (鎌倉期)	中世 (室町期)	近世	計
時間関係	4	27	13		3	47
季節		2	2		1	5
関係性		3	2			5
感情		2	7	3		12
事柄		1	5	3	20	29
人		1	2		3	6
場所			4			4
行為			3	2		5
その他		7	7	3	13	30
計	4	43	45	11	40	143

続いて、〔表3〕に後続名詞(句)の分類と時代ごとの用例数を示した。資料の時代区分は〔表1〕に示したものと対応する。時代ごとに資料の数に偏りがあるため用例数を以て比較するには充分でない。しかし、大まかな傾向として中世(鎌倉期)までは時間関係の名詞を後続させることが多かった(中古43例中27例、62.8%)が、近世では事柄の名詞の割合が増え(近世40例中20例、50.0%)、時間関係の名詞が後続する割合は減っている(近世40例中3例、7.5%)。

また、動作性のある行為の名詞は中世以降の『平家物語』、『義経記』など軍記物に見られた。

- (10) 土佐はもとより賢き者なれば、打任せての京上りの體にては叶ふまじとて、白布を以て、みな淨衣を拵へて、烏帽子に四手を付けさせ、
(義経記・巻第四)
- (11) 抑南都をほろぼさせ給ひける事は、故太政入道殿の仰にて候しか、又時にと(ッ)ての御ばからひにて候けるか。
(平家物語・巻第十)
- (12) やがて山王の御とがめとて、御二条の關白殿、おもき御病をうけさせ給しかば、母うへ、大殿の北の政所、大になげかせ給つゝ、御さまをやつし、いやしき下臈のまねをして、日吉社に御參籠あ(ッ)て、七日七夜が間祈申させ給けり。あらはれての御祈には、百番の芝田樂、百番のひとつもの、競馬・流鏑馬・相撲をのをの百番、
(平家物語・巻第一)
- (13) 第十二。平家室山、水島二箇所の合戦に打ち勝たれた事と、兼康が木曾に対しての謀反と、源氏の大將行家の合戦の事。
(天草版平家物語・巻第三・第十二)

3.2. 前接する語について

現代語の「ての」には動詞(+助動詞)が前接するが、『源氏物語』には「ての」に形容詞が前接した用例が見られた。

- (14) 聞きにくくかたはらいたしと思して、「大輔などが若くてのころ、友だちにてありける人は。ことにいまめかしようも見えざるを、ゆゑゆゑしげにものたまひなすかな。人の聞き咎めつべきことをのみ、常にとりないたまふこそ。なき名は立てで」とうち背きたまふも、らうたげにをかし。
(源氏物語・東屋)

山口(1998)が中古語の「て」連用句には、主句の主語・述語のそなえる状態を示すものがあるとした上でそれらに品詞的な偏りはなく「形容詞類による「て」連用句の例も極めて多い」と述べている。例えば「それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり」(竹取物語)、「かくたどたどしくて帰り来たれば」(源氏物語・夢浮橋)などの用例があり、中古語においては形容詞が様態を表す場合にも接続助詞「て」に前接できたことから『源氏物語』に「若くての」の例が見られると考えられる。また、動詞の前接においては「生く」、「死ぬ」が含まれる用例が複数見られる。

- (15) かく生き出でたまひての後しも、恐ろしく思して、またまたいみじき法どもを尽くして加へ行はせたまふ。(源氏物語・若菜下)
- (16) かの冥吏呵責の庭に、独り自業自得の断罪に舌をまき、この妻恩別離の跡に、各々、不意不慮の横死に涙をかく。生きての別れ、死しての悲しみ、二つながら、いかがせん。(海道記)
- (17) 生きての恥、死しての恥、いづれが劣らうずるぞとの取り沙汰で御座った。(天草版平家物語・巻第四・第二十一)

加えて、通時変化としては『虎明本狂言集』に「によつての」の形式が17例見られる。他の資料では『義経記』に「何によりての勲功候ぞ」の例が見られるのみであり、中世から近世にかけて定着したことが予測される。「と存じてのこと」、「と思ふてのこと」などの例も『虎明本狂言集』にのみ見られた。

- (18) それ山伏といつば、山にふすに依ての山伏なり(虎明本狂言集・こしいのり)
- (19) いや其さけがあるによつての事で御ざる(虎明本狂言集・じぞうまい)
- (20) 打ころいて、わらはもくびをくくらふと思ふてのことで御ざる(虎明本狂言集・どもり)

4. 古典語の「ての」の用法

現代語における「ての」の用法は2.1節の先行研究が指摘するように、接続助詞「て」の機能(原因理由、継起、付帯状況などを表すこと)の一部を担うことと相対名詞が後続する場合には「相対補充を表す」こととである。現代語においては動作性名詞の後続が非動作性名詞の後続に比べて生産性が高いのに対して、古典語ではもっぱら非動作性名詞が後続しており、「ての」の用法について接続助詞「て」の機能を踏まえつつ検討する必要がある。

上代、中古の接続助詞「て」について山口(1980)は「て」による接続表現の基本的な意味関係は、「二つ(以上)の事態が、空間的にせよ時間的にせよ、ただ並列されているというだけの関係」(＝並列性)とし、さらにその中に「時間的に継起する関係の認められるもの」(＝継起性)と「空間的に隣接共存する関係の認められるもの」(＝共存性)とがあるとした。近藤(2007)は『源氏物語』を対象として、接続助詞「て」に副助詞・係助詞が後接するか、評価の副詞が節内に現れるかという観点で接続助詞「て」の機能を分類した。その結果、副詞的な「て」節と継起的・原因理由的「て」節とがあり、現代語の従属節の分類でいうA類とB・C類との区別にほぼ相当するものであることを指摘している。

これらの研究を踏まえて「ての」の用例を概観すると基本的に接続助詞「て」が持つ用法に即して、副詞的なものと継起的・原因理由的なものとに分類できる。本発表では前者を「様態の用法」、後者を「時間の前後関係を表す用法」とし、後者が「ての」の中心的な用法であったことを指摘する。

4.1. 様態の用法

(21)、(22) のように「生きていながら」、「普通の」というような継起的な意味を強く持たない用法が見られる。動詞の場合、様態の用法として用いられるのは「生きての」と「うちまかせての」の用例とが中心であり、ひとまとまりの形式として存していた可能性も考えられる。

(21) こは生きての仏の国などに来にけるにやあらむと、空にひびきあがるやうにおぼゆ。

(枕草子・第二六〇段・関白殿、二月二十一日に、法興院の)

(22) 内侍八人、みな色々の小袖に白き湯巻を着たり。うちまかせての楽どもなり。

(とはずがたり・巻五)

4.2. 時間の前後関係を表す用法

時間の前後関係を表す用法の中には、後続する名詞を時間的に位置づける相対修飾が見られる。

(23) 河原の大臣の身まかりての秋、かの家のほとりをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみていれたりける (古今和歌集・八四八・詞書)

(24) 大和国葛城山に一人の僧あり、弟子をさきだてゝふかくなけぐ、三年過ての春、かの寺の、軒端の梅の木に、鳴鶯のこゑきけハ、 (虎明本狂言集・はくらくてん)

(25) 数ならぬ憂き身も人におとらぬは花見る春の心地なりけり (建礼門院右京大夫集・二十二)

(26) 今は昔、陽成院おりみさせ給ひての御所は、大宮よりは北、西洞院よりは西、油の小路よりは東にてなんありける。 (宇治拾遺物語・巻第十二・二十二)

季節の名詞が「ての」によって修飾を受ける場合には(23)「河原の大臣が亡くなられた年の秋」、(24)「3年が過ぎた年の春」といった意味であり、季節の名詞自体はいわゆる相対名詞ではないものの、相対修飾と見做しうるものである。「春」、「夏」、「秋」、「冬」に述語連体形が前接する場合(25)は、当該の季節の名詞に関する内容の補充であることから、ここでは「て」が時間の前後関係を表すマーカーとして働いていると考える。古典語における「ての」は後続名詞が非動作性名詞に偏っており、時間関係の「後」、「うへ」、「ついで」など相対修飾の関係になるものが多数あり、非動作性名詞を時間的に位置づける相対修飾が「ての」の中心的な用法であったと言える。また、時間の前後関係を表す用法には(18)、(19)、(20)のように「によつての事」、「と存じての事」、「と思ふての事」などの形式で原因理由を表す場合があり、これらは特に『虎明本狂言集』において見られた。

5. 後続名詞の動作性について

これまで見てきたように、古典語の「ての」には非動作性名詞、現代語の「ての」には動作性名詞が後続する傾向がある。「ての」という形式は同じであるが現代語では「家族を連れて外へ出る」の「外へ出る」を動作性名詞「外出」とすることで「家族を連れての外出」という「ての」の形式を作ることができる。しかし、古典語の「ての」は現代語に見られるような「て」節の連体化は行われておらず、後続の非動作性名詞を時間的に位置づける修飾を担っている。現代語と比較して言えば、漢語動名詞の出現や動詞連用形の動名詞化の生産性を踏まえた考察が必要である。

「～によつての事」、「～に対しての事」などの形式は中世以降に見られ、定着してきたことが予測されるものの、「ての」+動作性名詞の形式が生産的に使用されるのはさらにその後であると思われる。

6. おわりに

本発表では以下の3点を明らかにした。

- (i) 古典語の「ての」には非動作性名詞が後続する傾向が強く、時代によって名詞（句）の分類ごとに占める割合が異なっている。
- (ii) 古典語の「ての」には現代語の「ての」とは異なり、形容詞が前接する用例、動詞「生く」や「死ぬ」が前接する用例が見られた。
- (iii) 古典語の「ての」には様態の用法と時間の前後関係を表す用法とがあるが、時間の前後関係を表す用法のうち、非動作性名詞を時間的に位置づける相対修飾が「ての」の中心的な用法であった。

なお、古典語における動作性名詞の形成を踏まえ、「ながらの」や他の助詞をも含めた連体化について検討していく必要がある。また、各時代の調査資料の拡充と共に近世以降の通時的な考察が求められる。接続助詞「て」自体の機能の変化に着目し、時代ごとの詳細な用法分析や分類も必要であるが以上は今後の課題としたい。

調査資料・用例出典（調査の結果、資料中に用例が見られなかった場合には本文中で言及していない。）

新編日本古典文学全集：『萬葉集』、『古今和歌集』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『大和物語』、『平中物語』、『蜻蛉日記』、『落窪物語』、『枕草子』、『源氏物語』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『堤中納言物語』、『更級日記』、『大鏡』、『讃岐典侍日記』、『今昔物語集』（本朝部）、『方丈記』、『宇治拾遺物語』、『十訓抄』、『徒然草』、『海道記』、『建礼門院右京大夫集』、『東関日記』、『十六夜日記』、『とはずがたり』、Nifon no cotoba to historia uo narai xiran to fossuru fito no tame ni xeua ni yauaraguetaru Feiqe no monogatari. (Shelfmark: Or.59.aa.1) 大英図書館蔵：『天草版平家物語』、Esopo no fabulas: Latinuo uaxite Nippon no cuchito nasu mono nari. (Shelfmark: Or.59.aa.1) 大英図書館蔵：『天草版伊曾保物語』、大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』（清文堂出版）：『虎明本狂言集』【※以上の資料の調査には、国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』（ver. 2018.3）、中納言（ver. 2.4.2）を使用した。】

日本古典文学大系：『古事記』、『常陸国風土記』、『出雲国風土記』、『播磨国風土記』、『豊後国風土記』、『肥前国風土記』、『篁物語』、『宇津保物語』、『夜の寝覚』、『浜松中納言物語』、『狭衣物語』、『栄花物語』、『平家物語』、『義経記』、『平治物語』、『保元物語』、『太平記』【※以上の資料の調査には、国文学研究資料館「日本古典文学大系本文データベース」を使用した。】

参考文献

- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』「11.2.5.2 句を受ける「の」」329-330, 和泉書院
- 小林千草（1995）「生キテノ用ハ一抄物の反映することばと実相一」『國語と國文學』72（11）, 22-39, 東京大学国語国文学会
- 近藤泰弘（2007）「平安時代語の接続助詞「て」の機能」『國學院雑誌』108（11）, 174-183, 國學院大學総合企画部広報課
- 近藤泰弘（2012）「平安時代語の接続助詞「て」の様相」『國語と國文學』89（2）, 49-60, 東京大学国語国文学会
- 丹羽哲也（2006）「「ての」の用法について」藤田保幸・山崎誠（編）『複合辞研究の現在』, 221-234, 和泉書院
- 姫野昌子（1983）「動詞「て」形の連体修飾構造」『日本語学校論集』10, 25-43, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（編）（2014）『日本古典対照分類語彙表』CD-ROM, 笠間書院
- 茂木俊伸・森篤嗣（2006）「テノ名詞句の意味と形式」『日本語教育論集 世界の日本語教育』16, 139-153, 国際交流基金日本語事業部
- 山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院
- 山口堯二（1998）「中古語「て」連用句とその周辺」佐藤喜代治（編）『国語論究第7集中古語の研究』213-247, 明治書院